

未来の街づくりを担う情熱



経営理念

私たちには社会基盤の整備という
誇りある仕事を通じ
常に信頼と共感を得られる企業として
お客様と共に
人生の喜びや感動を創造する

トップメッセージ

今、時代の大きな転換期点に立っている日本



代表取締役社長
遠藤 和彦

2013年は、東北の震災復興への投資が一層強化される中、経済の9割を占めている民間産業も、政府の成長戦略や円高是正を背景に収益性の改善が図られ、新たな設備投資への動きも活発化するなど、日本経済が回復傾向に転じた一年と言えます。

更に、原発事故という先の見えにくい大きな問題を抱えながらも、日本は世界で類を見ない安全安心な先進国家として、高い評価を獲得して、2020年の東京オリンピック開催をも勝ち取ることができました。

その高評価の背景には、大都市を中心に街が美しく整備され、交通網も機能的にネットワーク化が進み、人々の暮らしや、どんな時にも快適に守られていることが大きな要素としてあげられます。

こうしたゆるぎない日本の社会基盤をつくり、育て、支え、守ってきたもの。それが、日本の建設産業です。

国土の強靭化を含め、社会インフラに対する考え方方が本質から見直される時代に入った今、建設産業に求められる社会的責任は、更に重要なものとなってきていると、強く感じております。私たちは、こうした社会性の高い誇りある仕事に、現場第一線で携わることを喜びとして、これまで培ってきた経験と技術を注力し、情熱をもって「未来の街づくり」に貢献して参ります。

CSR方針

私たちのCSRとは、経営理念の実践そのものであり、社会とお客様から信頼と共感を得られる企業を目指します。

1. 地域社会との調和
2. 建設産業の発展に貢献
3. 法令遵守と透明性の高い経営
4. 組織と人を成長させる
5. 総力経営で現場最適を実現

●報告対象期間

2013年1月～12月

当該年以外の内容も一部掲載しております。

震災を乗り越えて 被災地を再生する力

被災した線路あとを走るバス高速輸送システム(BRT)の急速施工に貢献



JR大船渡線のBRT建設



JR気仙沼線のBRT建設



BRT最知駅



大船渡の墓石海岸付近

突貫工事で完成にこぎ着けました

気仙沼BRT工区は延長約11.6kmを4工区分割施工と範囲が広く、各工区に職長を配置し施工ましたが、工区間の移動が大変でした。震災後の労務不足で工程が進まない時もありましたが、支店の全国的な労務調達と宿舎確保、昼夜作業を行い、無事部分竣工できました。掘削重機が25台での土工事だったので、安全面では、重機巻き込まれ災害、クレーンモードでの飛来落下災害に留意し、この突貫大規模工事を完遂することができました。この現場で経験したことを活かし、自己成長を続け、お世話になった人達と共にまた一緒に作業したいと思います。



東北支店 土木部
鎌田佳祐

沿岸部のバス路線を建設し、移動手段を確保する東北土木

東日本大震災により、沿岸部の鉄道網は甚大な被害を被り、地元住民の大事な交通手段が破壊されました。

なかなか復旧できない鉄道の代わりに、BRTが導入されました。線路区間を盛土し橋梁躯体を造り直し、全線舗装で復旧して造られたバス専用道は、渋滞がなく所定ダイヤ通りに定時運転が可能になる交通手段であり、鉄道復旧に比べ安価で迅速に開通できます。

大船渡線工事では、休日や夏季休暇も稼働し最盛期には70人体制で挑み、無事2013年9月28日にBRT区間担当工区13.3Kmが開通しました。

気仙沼線はトンネル区間が多く、昼夜80人体制で工事を進め、2013年9月5日に2期工事11.6Kmを無事完成させました。鉄道復旧までの暫定策と位置付けられており、今後の海岸復旧、高台移転により将来は一部路線変更して、鉄道での復旧が見込まれています。

両工区共、地元の通勤・通学の大変な足であり、予定通りの開業は、北海道、関西、四国、九州からも馳せ参じてくれた作業員の方々の協力が無ければ成し得ませんでした。

被災沿岸部の大動脈を復活させ、被災された方々の貴重な足の確保は使命であり、鉄道復旧工事に向井建設は総力を挙げて取り組んでいます。震災直後の新幹線復旧工事に始まり、仙石線、石巻線、東北本線と仙石線相互乗り入れに日々社会貢献を果たす仕事に挑んでおります。

地元の人のために早く!

最初、現場に行った時は大船渡駅も崩れ、海岸線に沿って走っていたレールも見当たらず、山は崩れ、殆どの橋は落ちていました。「本当に復旧できるのか」また岩手県被災沿岸部で人もいない、泊る所も無い状況で自分はこの工事を完遂できるのか不安でいっぱいでした。工期短縮のため、土工事と躯体復旧を同時に進め、橋梁を陸地で作り、大型クレーンで仮設したり、トンネル箇所は他社が帰った後、残業で作業したり、夏季休暇無しで施工し、何とか開業にこぎ着けました。護岸復旧が残っていますが地元の方々に「感謝」される仕事ができたことが誇りです。



東北支店 土木部
佐藤大志

みんなの想いが復興の力に

JR仙石線2015年6月全線開通に向けて



東日本大震災により、宮城県の二大都市仙台～石巻間を結ぶ仙石線の沿岸部も壊滅的な被害を受け、現在、高城町～陸前小野間が未開通で石巻方面からの通勤者、学生の交通手段が寸断されています。

高城町～陸前大塙間のトンネル改良、流出部の盛土復旧、駅部解体復旧、護岸及び擁壁復旧など多岐にわたって施工を担当しております。

仙台～石巻間の唯一の鉄道を復旧することは、社会基盤の再構築には欠かせない工事であり、こうした重要な仕事に取り組んでいることを誇りに思っています。

1日も早い開通を目指して

当社の担当工区は土工事が多く、将来線路の軌道が沈下しない様、転圧管理に重点を置いて施工しています。今後駅舎の解体再構築、移設路線部の撤去、崩壊箇所の切盛土があるので、重機災害防止に留意し、2015年6月の全線開通まで、全工期無災害を必ず達成します。



東北支店 土木部
平木康友



陸前富山駅付近



仙石線の路盤復旧工事



仙石線が壊滅的被害



擁壁・護岸復旧

いわき出張所が地域再生に向けて奮闘

未曾有の被害をもたらした東日本大震災の発生から約3年が経過しました。今なお、震災の影響により、避難・転居を余儀なくされている方は、28万人を超えております。

福島第一原子力発電所の大量の放射性物質が拡散した20km圏内の警戒地域は、2013年5月までに段階的に、帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域に再編されています。

大震災直後に開設されたいわき出張所では、この警戒区域内で最初の除染モデル事業から参加しています。葛尾村や田村、大熊町のモデル事業と田村本格除染、富岡町インフラ整備除染を行ってまいりました。施工体制は、土地柄をよく知っている地元の方々を主として最大120名で作業にあたりました。

除染という事業が注目される中、警戒区域では国(環境省)直轄本格除染を最初に田村で完了させました。

また、福島第一原子力発電所内では、今までに防潮堤防、津波瓦礫の撤去、原子炉建屋の瓦礫運搬、キャスク保管庫、タンクの組立などを行いました。向井マンの使命感に燃えて奮闘中です。



民家の除染作業



いわき出張所の仲間たち

東京本社と東北支店のパワーを結集

福島の災害復旧は、東京の協力会社と福島の地元協力会社のコラボレーションで行われており、関東地区と東北地区に拠点を持つ当社ならではの、協働力を發揮しています。

福島第一原発工事では、資機材の搬入や放射線により作業時間に制限があり思ったように作業が進まないなどの問題も有りますが、この地域の方々が故郷に戻れる日を目指して、一歩一歩工事を進めて責任を果たして行きたいと思います。



土木統括部 いわき出張所
所長 高山直行

未来に向けたプロジェクトが完成へ

一番町二丁目四番地区市街地再開発事業に取り組む

急速施工をリードする

杜の都として知られる仙台の中心部に、既存の都市基盤を活かしながら、広域的な商業・業務の高度集積拠点を形成する再開発工事が進んでいます。

その一つ、2015年度に開業予定の仙台地下鉄東西線(仮称)一番町駅に直結する商業・業務・住宅の複合再開発事業は、一番町二丁目の商店街の活性化につながると期待され、周辺地域の様相も一変すると思われます。当社東北支店から100mに位置する現場で、22階建住宅商業複合タワーマンションを施工しており、解体工事、土工事、仮設工事、PC建方工事に加え、建物と直結する地下鉄駅出入口口整備を土木工事が担当しています。2011年11月に施工を開始し、2014年3月竣工を目指しています。

また躯体工事を中心に、深刻な労務不足の現状の中で、当社は工程を左右する構造PCの建方を担当し、1フロア6日サイクルという厳しいノルマを、連日の早出残業で消化してきました。

施主を含めた関係者一丸となって完成を目指して、「仙台市のど真ん中の高層ビル建設を復興のシンボルに」を合い言葉に日々励んでいます。



一番町二丁目四番地区市街地再開発事業イメージ図

仙台一の繁華街が一新します

被災地仙台の中心地にある復興のシンボル的再開発ビルを担当できて光栄に思っています。周りは繁華街、そしていろいろな人からも見られておりままでの、心地良い緊張感を持って従事しています。

チーム力を発揮して、安全施工、品質確保を心掛け、建ち上がるビルの高さと共に、仙台の皆さんのがパワーが上がるようになると、仲間と共にやり甲斐のある大仕事を、毎日「いつも元気で明るく丁寧に」をモットーに懸命に努めています。



東北支店 宮城営業所
職長 佐藤盛人

宮城県北部で、大崎新病院建設

躯体三職(鳶土工・鉄筋・型枠)施工体制で

宮城県の県北にある大崎市・栗原市の医療拠点として大崎市民病院は重要な存在です。地域医療支援病院、地域災害拠点病院、地域がん診療連携拠点病院などの施設認定を受け、安全で質の高い医療の提供をしています。併設されている救命救急センターは、県北唯一の三次救急医療施設として県北地域の住民約37万人の命を預かる非常に大事な役割を担っています。

2014年3月の完成を目指し、現在建設が急ピッチで進められている新病院は、市民はもとより県北地域全体から、より高度かつ先進的な医療が受けられる病院として大きな期待が寄せられています。

竣工が待たれているこの病院建設ですが、躯体工事を担当する当社にとり、東日本大震災の影響から労務不足、資材不足という深刻な



大崎市民病院完成予想図

課題を抱えています。大変厳しい環境にある中、東北6県に営業所を置く強みから、労務手配を行ってなんとか円滑に工程を消化しています。躯体三職である鳶土工事、鉄筋工事、型枠工事を請負い、全盛期には合計100人という人員を配置するなど、機動力を生かして元請のご期待に応えるべく施工体制を整え順調に工程を進めています。

街づくりに欠かせない最新の医療設備を整備した新病院完成に貢献できるという使命感をもって、期待を寄せている地域住民の皆様のためにも、持てる施工管理力、技術技能力、機動力を発揮して最高の建物を残せるよう現場員が一体となって施工にあたっています。

新病院完成を待っていてください

病院建築工事において元請ニーズに応え、専門である鳶土工事のみならず鉄筋・型枠工事の「躯体三職」工種の管理に挑戦し、日々緊張感を持って取り組んでいます。

施工に際しては鳶土工45人、鉄筋工30人、型枠工25人、合計100人の人たちをまとめるため、毎朝「戦争」状態でした。

更に冬場の猛吹雪、夏の台風など苦労は絶えませんでしたが、躯体工事は工程通り11月には無事上棟し、「やればできる。」ということを実感しました。

市民病院建設という、地域住民の生活に欠かせない「地図に残る仕事」に携わることを誇りに思い、これからも安全作業を心掛けます。



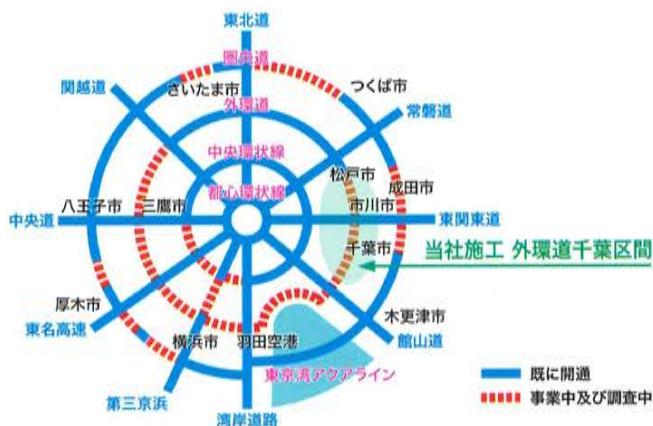
東北支店 宮城営業所 大槻雄大

より快適な都市を 高速交通システムを支える土木

首都圏の血流改善に大きく貢献

東京外かく環状道路(千葉区間)7工区整備

首都圏の渋滞解消のために計画された都市計画道路の中に、東京外かく環状道路があります。これは、東京の渋滞緩和のために、東京の大田区から埼玉を経て、千葉県市川市に至る延長85kmの道路であり、高速道路計画3環状9放射線の一つとして工事が行われています。



都心から放射状に伸びる道路に比べ、それらを連絡する環状道路の整備が遅れているため、通過車両が都心に集まることになり、慢性的な渋滞が問題になっています。

東京外かく環状道路などの環状線の整備により、首都高の慢性的な渋滞緩和、都心部の通過車両の抑制、分散導入を図り、日本の「心臓」である大都市「東京」の血流を改善して、日本を体の中から元気にするピックプロジェクトです。

東京外かく環状道路千葉区間の松戸市小山～市川市高谷12.1kmのうち当社施工区間は、国分・市川・大和田・京葉・田尻・田尻その4・高谷JCTの7工区3.1kmで、全体の26%です。千葉工区の完成の遅れによる経済的損失は、1日約5億円にものぼるといわれ、当社ではこの工事において最大400人/日を超える人員を動員し、早期の整備遂行へと現場力を結集し臨んでいます。

最高の仲間と最高の躯体を

土木統括部 土木第一部 寺坂基宏

2012年10月に着工した国分工区は、堀割構造の地下躯体を開削工法で施工しています。工区延長が1.8kmと非常に長いですが、元請を含め業者間の連絡・調整を密に行い無事故・無災害で施工中です。

これまで数々の大型

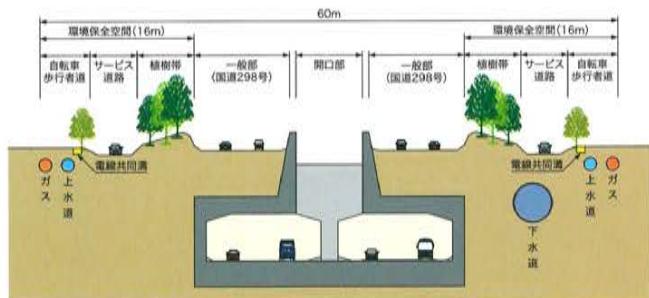


国分工区チーム

現場と共に施工してきた信頼のおける仲間たちと、今までの経験を生かし、最善の段取りのもと、最高のコンクリートを打設し、周りの皆様より安全・品質共に高い評価を頂けるよう、チーム国分一丸となって竣工まで駆け抜けます。

東京外かく環状道路(千葉区間)の主な構造

千葉区間は、限られた用地において最大限の効果を上げ、騒音などにも考慮した地下構築物であり、上段に一般道、下段に高速道路の堀割スリット構造が採用されています。



田尻工区 ボックスカルバート築造



国分工区 函体新設



京葉道路交差部の難工事に挑む

2010年より施工している京葉工区は、「外環」と京葉道路が接続する京葉ジャンクション部の工事であり、供用中の京葉道路の真下に躯体を構築しなければなりません。そこで、大きく京葉道路を迂回させ施工をしています。

私たちの京葉工区の躯体が完成し、元の位置に京葉道路を戻さなくては、他工区の作業が遅れてしまします。そのため、工期短縮として函

体頂部を先に構築する逆巻き工法が採用されています。

2013年9月末までに躯体の構築を終えるという厳しい工程ですが、私たちの後に続く仲間たちのためにも、工程厳守で施工を行っています。



土木統括部 土木第二部
黒尾知宏

京急蒲田「開かずの踏切」を解消

着工から12年目を迎えた京急蒲田駅付近連続立体交差事業



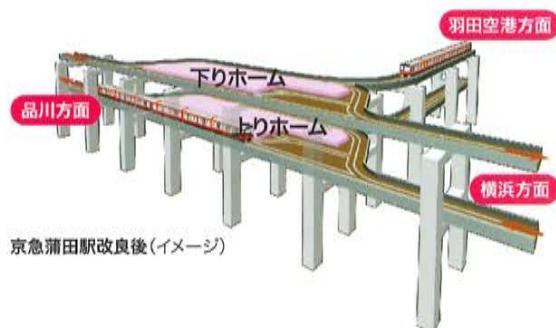
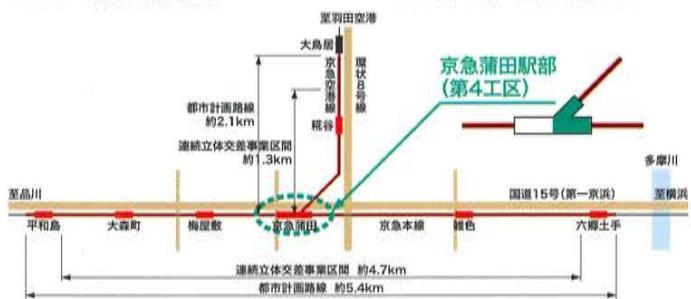
2002年 作業着工初期当時



2008年 2階部分駅舎構築



2012年10月 全線高架化完了



踏切遮断時間1日7.8時間がゼロに 踏切の渋滞は解消

京急本線平和島～六郷土手間4.7km、空港線京急蒲田～大鳥居間1.3km、計6kmを高架化する「京急蒲田駅付近連続立体化工事」は、2001年に着工された京急電鉄を代表する営業線近接工事です。一私鉄の高架化以上に、線路で分断されていた街の発展、駅前広場の整備、渋滞の解消など沿線住民や京急蒲田駅周辺を通過する車輌により、待望の工事でした。国や都、区まで関わり都市計画が一変する一大プロジェクトに、着工から12年間、躯体工事や線路切替工事という重要な作業を担当することができ、皆が誇りを持って作業にあたっています。

当社は京急蒲田駅南側半分と、国道横断部を含む「第4工区」を担当しており、1日4.7万人もの人が利用する蒲田駅において、絶対に列車の運転に支障をきたすわけにはいかず、安全第一はもちろ

んのこと、輸送障害を起こさないという強い決意を胸に、工事を進めてきました。当社は施工初期から携わり日曜祝日以外は休まない昼夜勤体制を12年以上続けてきました。

2012年10月に全線高架化が完成し、1時間の内、最大53分も踏切が遮断されていた「開かずの踏切」を含む、全28ヶ所の踏切が撤去されました。当社工区内で、780mもあった慢性的な渋滞が改善され、通過車輌のスピードアップが図られて、景観が美しい街に変貌を遂げようとしています。

この工事も、完成を迎えようとしています。完成を間近にして、沿線地域、首都圏の更なる発展を描きながら土木部関係者、協力会社の皆さん、日々の作業を大事に、打合せを密にして「安全施工・高品質」をまとうすべく、竣工を目指し日々邁進しています。

助け合いの心を大切に

鉄道現場は、毎日、全ての作業を予定通り無事に終わらなければ、電車を走らせるすることはできません。そのため、業者・職種の垣根を越えて、声掛け・助け合いを行うよう指導・管理に心掛けています。

私は、蒲田の現場に携わり7年目となります。作業時間が3～4時間と限られた時間しか無く、1つのミスが列車の遅れに繋がってしまう線路内の作業や、駅利用のお客様の気持ちになって、細やかな気配りが

必要となる改札口やホームの工事など、まわりの方々の協力無しには、無事に終えることができない工事を数多く経験してきました。これからも、作業所で培われた「助け合いの心」をもって、共に働く仲間を大切に、日々の作業にあたっていきます。



土木統括部 土木第二部
大越基晴



2012年10月 全線高架化完了



最後の切替作業を終えて 京急蒲田駅施工の仲間たち

受け継がれる技

百年の時を越えて



技の伝承は人づくり

伝統的な職人技の伝承は、近年危機的状況にあると言われています。そんな中、当社では1981年から技術、技能系社員の採用を開始しました。毎年4月に入社した新入社員は、大卒・高卒の隔てなく、2~3ヶ月の研修を受けた後に現場に配属され、優秀な先輩の下で経験を積ませ、技と技術力、管理能力を磨きます。技能グループ、施工管理、計画などの技術・技能の伝承を確実に行い、未来の建設業を担う若者を育成しています。技術・技能面だけでなく、個々人が高い志と明確な努力目標を持ち、自立性のある有能な人材育成を行っています。一人一人がより高い専門的なスキルを身につけ、建設という崇高な仕事に携わることの喜びや誇りを持った「人間力」、困難に立ち向かい完遂する「現場力」、これが「向井の力」です。



昭和30年代の施工グループ

鳶の技で、不可能を可能に

現場事務所直下の超難度な鉄骨建方に挑戦

現場事務所直下に、鉄骨を建て込むのは無理か

東京都千代田区の新築ビル、既存建物の解体後、地下躯体を造るために土留用切梁が縦横に走り、3基のタワークレーンが立ち、乗入構台が作業場所を覆い、敷地端部に現場事務所があります。当初の設計では現場事務所直下は鉄筋コンクリート造でしたが設計変更があり、鉄骨造になりました。

問題は地下に障害物が多く、乗入構台と現場事務所との間7mという狭さに長さ13.5m、重量5tの鉄骨を降ろして現場事務所直下に鉄骨を差し込む必要がありました。当初鉄骨建方は無理と考えられ、現場事務所移設後に施工する方針が出されました。

この場合、後施工になってしまうと、切梁が残置する。1階ヤードが開口部となる。地下への雨水進入を止められない。鉄骨建方が夜間作業となる。地上鉄骨時の作業ヤードが確保できない。鳶工30人以上の確保が必要。外壁工事とのラップ作業による上下作業の危険性など安全・工程・コスト面で大きな課題を積み残さねばなりません。

天秤計りを応用した鳶の知恵

現場事務所直下に施工ができないか、という可能性について、経験豊富な職長を交え検討が開始され、施工法を様々検討した結果、バランサーを新規に考案することになりました。

バランサーとは、天秤計りの形に似たもので、建物内に資材を吊り上げるなど、上部に障害物がある場合に吊り荷の重心とクレーンの吊り位置を変えることができる吊り治具です。ところが既存のバランサーでは今回の条件で使用できるものがない。また重量や形状の違う数種類の鉄骨を、1種類のバランサーで吊らなければならぬなど、解決しなければならない難問が沢山ありました。「鳶の知恵を出せば、なんとかなる!」といろいろな問題点を検証した結果、吊り荷を外しても跳ね上がりがない特殊なバランサーを作るという案が採用されました。鳶のノウハウを駆使して模型を作り、検討を重ねた結果、考え出されたのが「重心可変バランサー」です。



「重心可変バランサー」で問題解決

2ヶ月間試行錯誤して完成したバランサーは、リモコンで遠隔操作できる電動ワインチを用いて、ウエイトを移動させることによりバランスが取れるので、重量の異なる梁・柱を安全に建て込むことができるようになりました。またウエイトを水平かつスムーズに移動できるようワイヤーロープと滑車を組み合わせ「ロープウェイのゴンドラが水平を保って移動できる原理」も使いました。安全性、強度など法令遵守は事前に元請により確認されました。

このバランサーを鳶たちは慎重に操り、鉄骨や部材を計画通りに狭隘部に差し込み、順調に建方を行うことができました。

昔から使ってきた道具と知恵、そして高度な鳶の技が困難な建方を可能にし、大幅な工期短縮と工事費の削減など計り知れない成果が得られました。



バランサー ウエイト 移動滑車 ワイヤリング
2台ある電動ワインチにワイヤーを通す



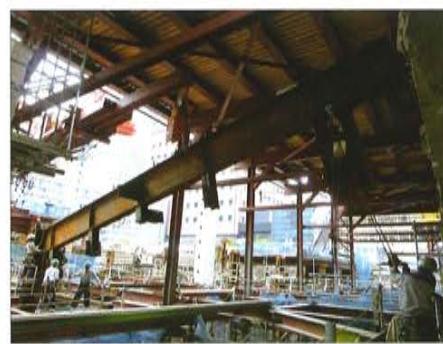
バランサー ウエイト 水平移動 テスト
実際のバランサー重量や滑車の向きの確認を行う



鉄骨大梁、重心可変吊り込み
吊り込む大梁が回転しないよう注意深く介錯する



狭隘部へ斜め吊り鉄骨大梁を呼び込み
最大13mある大梁は、取付けと介錯の連携が重要



事務所下に大梁を吊り込み
慎重に介錯し、電動チェーンブロックで降ろす

考案したバランサーの吊り込み 100%大丈夫を実証

建方順序によっては、このバランサーのウエイトが既に建てた柱にぶつかるので、1本1本の柱の取り付け順序にも、間違いないよう慎重に計画した。現場事務所の構台と切梁をかわすため、柱を斜めに吊り込み投入しなければならない。

「重心可変バランサー」を使った鉄骨建方に50ピースを6日間で無事施工できた。その後鉄筋工事、型枠工事、コンクリート打設が順調に行なわれ1階床が構築された。

この「重心可変バランサー」が使用できたことで、事務所下の大きな後施工の吹抜け空間が塞がれ、現場全体の作業ヤードにゆとりが生まれて、作業間で錯綜するヤードの競合が大きく緩和されることになった。元請の作業所幹部から「最初は諦めていたが、まさか本当にできると思わなかった。」と感嘆の言葉を頂いたのが、何より嬉しかった。はじめに「自信はあるのか。」と聞かれて「100%の自信があります。」と答えた責任をまとうし、誇らしく感じている。



建築直轄施工部
職長 住吉秀明

心・技・体を磨く

超高層時代を見据え

育成してきた鳶集団の活躍

1950年代までの野丁場鳶は、杭打ち、山留め丸太を組んだ揚重作業や足場組み、掘削・コンクリ打ち、ワインチ作業、曳家工事など、簡単な道具や資材を用い創意工夫と卓抜した技能を駆使して何でもこなしていたのです。特に、鳶が得意とする揚重作業は、古くは、二又、三又、坊主丸太を使い、ワインチで資材を巻き上げました。大正時代からはガイデリックが開発され、高層ビル建設に対応できるようになりました。

建設技術の発展と共に工種は専業化し、大型タワークレーンの開発が超高層ビル時代を出現させました。重量の鉄骨建方や重仮設を担える先鋭的な鳶集団の需要が高まり、昭和58年から社員鳶の養成という社長方針が打ち出され、1986年PTグループ(精銳部隊)が誕生しました。1期生は熟練鳶グループに交じり、鉄骨建方、クレーン組立解体、重仮設工事のノウハウを短期間で吸収し、次のPT世代へ受継いでいきました。

綿密に練られた工程管理、施工計画があつてこそ鳶グループの技が活かせます。呼吸のあった「チーム力」と他社と差別化できる「現場力」となるのです。

1991年、工事長グループが担当した横浜ランドマークタワーの最大クラス1500tmの大型タワークレーン組立や鉄骨建方技術をPTグループが受継ぎ、六本木森ビル、東京ミッドタウン、新丸ビルなどの900tm大型タワークレーン組立、超高層鉄骨建方を確実に施工するなど、技術、技能の伝承が図られ、現在では様々なビルプロジェクトを任されるプロ意識の高いグループが育っています。



坊主による揚重作業再現



タワークレーンの組立

15人目、2013年建設マスター顕彰者

仕田義人(建築直轄施工部 仕田グループ職長・課長)



仕田職長の入社は1987年。鉄骨建方を主な業務とするPTグループに所属し、経験豊かで腕の良い先輩に指導されて、鉄骨建方の醍醐味を全身で感じ取り、技能の習得に拍車が掛かって、いつしか先輩と呼ばれる立場になっていた。2003年に職長になり、現在は仕田グループを率いている。

新丸ビル、銀座イーストをはじめ、いくつもの難工事を成功させてきた。1級技能士、基幹技能者、そして2級建築士資格を持つ勉強家である。

指導者として責任の重い立場であるが、施工レベルの向上に日々努力しており、2013年10月顕彰を受賞した。



技を極めて職長に

師弟の絆

1992年、第1回建設マスターに選ばれた国重徳美は、1958年建設業界に入職し、鳶歴45年で現役を引退しましたが、その後も労務安全部安全指導課に所属し、豊富な知識と経験をもって、指導員として、後進の育成にあたっています。

前川工事長傘下で研鑽を重ねた国重は、1976年職長に昇格し、横浜ランドマークタワーなどの大型鉄骨建方工事を担いました。入社以来、国重職長の下で厳しく鳶の技を修行してきた住吉秀明は、ランドマーク工事を経て、1993年、10年目に職長に昇格し、茨城県庁舎、六本木森ビル他、次々と大型現場を任せられた。そして住吉グループを率いる存在に成長し、2005年に建設マスターを受賞しています。

数年前に、国重指導員が、住吉が職長を務める現場を巡回したとき、「国重さん、今職長になり現場を任せられ、計画打合わせや仕事の段取りなどをするようになり、はじめて職長の大変さが身に染みてわかりました。国重さんの下で働いていたときは、何も考えないで怠けたり、時には無断で休んだり、悪口を言ったりして未熟でしたね。」と過去の自分を振り返り、しみじみと語ったのです。国重は「住吉、大きくなったな。リーダーは決断力が大切だ。仕事にあたる時は、あらゆる方向からものを見て考える。きっとよい案が浮かぶはずだ。経験と勘を養い、記録も大事だよ。」とアドバイスし励ました。国重指導員が50年間指導して、大型現場を任せられる職長にまで育ったのは、住吉一人というほど、人材育成は難しいものです。



新入社員教育にあたる
国重徳美指導員



六本木森ビル
住吉秀明職長(2001年)

優秀な技能者の評価制度

1992年に発足した優秀施工者国土交通大臣顕彰(建設マスター)は技能者の誇りと意欲を増進させ、社会的評価・地位の確立を目指しており、2008年に始まった基幹技能者と共に、技の証となっています。

建設マスター受賞者一覧

| 受賞年度 | 受賞年度 | 職種 | 所 属 |
|--------|-------|---------|------|
| 1992年度 | 国重徳美 | とび工 | 東京本社 |
| 1995年度 | 茂木弘 | とび工 | 東京本社 |
| 1998年度 | 菅原邦男 | 建設機械運転工 | 東京本社 |
| 2000年度 | 福島信明 | とび工 | 東北支店 |
| 2002年度 | 菊池利章 | とび工 | 東北支店 |
| 2003年度 | 前川光三 | とび工 | 東京本社 |
| 2005年度 | 大川正行 | とび工 | 東京本社 |
| 2005年度 | 住吉秀明 | とび工 | 東京本社 |
| 2006年度 | 大森良記 | 鉄筋工 | 東京本社 |
| 2007年度 | 福士哲次 | とび工 | 東北支店 |
| 2007年度 | 重松正広 | とび工 | 東京本社 |
| 2008年度 | 小野賛一郎 | とび工 | 東京本社 |
| 2010年度 | 秦康亨 | とび工 | 東北支店 |
| 2012年度 | 木村善実 | とび工 | 東北支店 |
| 2013年度 | 仕田義人 | とび工 | 東京本社 |

日本の技を世界に

ベトナムの未来を創る職人を育成

国づくりを担える人材を育てたい



代表取締役会長
向井敏雄

2009年よりベトナム人技能実習生の受け入れを行ってきた目的は、国内の労働者不足を補うことではなく、ベトナム人の技術・技能者のレベルを高めることであり、日本のゼネコンが海外で工事を受注した際にそういう実習生が対応できるような体制を作ることです。加えて言えば一人でも多くの知日家親日家を作り、日越友好の更なる発展にも役立てればと考えています。

日本での研修成果を上げるために、実習生の教育係として「生活指導員」「実習指導員」を設けるとともに、2012年冬からベトナム人女性通訳を正社員に採用して、多角的にサポートしています。既に56名のベトナム人実習生が来日し、向井建設他受け入れ企業で実習指導を受けています。この事業に賛同した技能実習生受け入れ企業の就労条件の違い、生活文化の違いなど様々な諸問題を共有し、その解決を図ることを主な目的として、2013年2月「海外建設技術・技能人材育成協議会」が設立されました。企業・実習生双方が満足し、安心して働く体制を整備していきます。

1期～6期生 延べ269名が訓練校で学ぶ

2009年海外建設技能実習制度を利用し10名のベトナム人研修を受け入れました。2012年には日本での実習をより効率的に行うため、ベトナムの首都ハノイから85km離れたニンビン省の国際職業訓練校で現地研修を開始しました。寮で団体生活を送りながら「日本語の基礎」「安全品質・工程管理ノウハウ」「日本式の施工技術・技能」など4ヶ月間の事前研修を行っています。当初型枠のみでしたが、その後薦、鉄筋が加わり、内装、左官、溶接など業種を広げる予定です。



訓練校舎玄関前の指導員と研修生

ベトナム人の気概に触れた指導体験

経営企画部 ベトナム事業推進室 阿部健一(鉄筋指導)



2012年6月に国際職業訓練校に赴任し、2013年10月まで1年4ヶ月間、2期生から5期生に鉄筋施工を指導しました。

まじめな国民性の研修生は人の話をよく聞き、将来は鉄筋の技能を学んでベトナムに帰国し、リーダーになりたいという希望を強く持っています。難しい入校試験では、組んだことがない鉄筋の試験課題を前に、同じ形を作ろうと必死で取り組むチャレンジ

建設専門工事業では初となる

「民間提案型普及・実証事業」をJICAと契約

2013年12月、向井建設は国際協力機構(JICA)との間で、ODAによる「ベトナム国建設専門工事技能のベトナム輸出に関する普及・実証事業」にかかる契約を締結することができました。本事業は、我が国の中企業などの製品・技術が途上国の開発に有効であることを実証するとともに、現地での適合性を高め、普及を図ることを目的としたもので「民間提案型普及・実証事業」として実施されているものです。この度の契約は当社の専門工事技能者を講師としてベトナムに派遣し、直接指導することで、ベトナム国内における専門工事技能の向上と有能な建設技能者育成への取り組みが評価され、建設産業の専門工事業として初めて実現したものです。

実習指導員、生活指導員が技能実習生をサポート

実習指導員の仕事は、技術的な面での指導と合せて人間関係も重要なポイントです。

ベトナム人と日本人がペアを組んで作業するとき双方の性格を考慮して組み合わせないとトラブルの元になります。ベトナム人の間でも、北と南の出身者では風習が違い、一般常識でも日越双方で異なる部分が多く、その認識の違いから思わぬトラブルに発展することもあります。お互いの文化・風習を知り、理解度を深めることができが大切であり、海外実習生を受入れる際の基本だと考えます。課題としては、実習期間の短さです。10年でやっと一人前と言われる職人の世界で、研修期間3年では「ようやく技能が身に付いた」という頃に帰国となるのが残念です。

コミュニケーションをスムーズに

2012年9月の1期生に続いて2013年3月に2期生、11月には3期生が来日し、現在30名が現場実習中です。

通訳のロアンの配属前は、彼らとのコミュニケーションがうまく取れませんでした。身体の調子が悪いとき、また給料明細の説明など言葉の障壁がありました。向井敏雄会長が通訳ロアンの採用を決定され、来日後本社では会長と同フロアに席があり、会長(=会社)と接する機会が多く、その考え方を熟知し、逐一実習生に伝えることができます。

通訳の存在は、実習生と受入れる側の双方に大きなメリットになっています。

国際職業訓練校でのベトナム人受け入れ状況

| 入校希望数 | 合格者数 | 来日者数(うち当社) |
|----------|------|-------------------|
| 1期生 51名 | 11名 | 2012年10月 7名(7名) |
| 2期生 79名 | 25名 | 2013年3月 23名(13名) |
| 3期生 393名 | 56名 | 2013年11月 26名(12名) |
| 4期生 231名 | 44名 | |
| 5期生 105名 | 64名 | |
| 6期生 75名 | 50名 | 今後来日予定 |

精神は、日本人にはない気概に溢れており、感心させられました。

日本で技能実習3年という短い滞在期間の中で職長になるのは難しいと思いますが、サブリーダークラスにはなって欲しいと念じています。言葉だけが問題であり、彼らは十分な高い技能を持っているので、3年後帰国したら鉄筋職人としてベトナムの社会インフラ、街づくりに貢献できると期待しています。

社会とつながる私たち

街と調和する作業所



仮囲いは現場の顔、だから綺麗に

仮囲いは、現場の「顔」であり、歩行者が安心して通行でき、近隣、地域の方々に綺麗に見栄え良く感じていただけるよう整然と組立てることを、心掛けています。

特に、台風や風が強い日は異常が無いか巡回し、何事もないことが確認できた時は「ホッ」とします。

また、組立て中には、第三者災害を発生させないよう近隣の方々、歩行者の通行を第一に考えて、仮囲いの組立てをするよう作業員に指導しています。



直轄施工部 鶴見工事事務所
所長 茂木 弘



向井建設技能オリンピックで仮囲い種目を競う

2002年から既に12回開催している技能オリンピックでは、仮囲いの技を、社員、協力会社の選手が3人1組で、日頃鍛えた技を発揮して、優勝を競っています。審査項目は精度・見栄え・強度・組立時間です。

仮囲いは着工から竣工近くまで現場の周囲を守る重要な工種であり、薦技能者の技の巧さ、安全へのこだわりが、試されます。



2012年技能オリンピック 仮囲い競技

現場職長会で活躍する優秀職長を表彰

いかに技術革新が進んでも、建設業は「人がつくる」産業であり、職長は、安全・品質・工程・原価を左右する重要な存在です。

当社は「職場環境改善とモラル現場第一線でリーダーシップを発揮し、作業所運営全体最適と社会的イメージアップに貢献する。」という基本方策を掲げ、職長のあるべき姿を示し、重点的に指導を行っています。

現場職長会活動において、当社の職長は中枢の役割を任されることが多いため、積極的に会を運営し、現場のリーダーとして関係者と協力して、災害の起きにくい作業環境を整備していくことを理想に掲げています。

2011年発行した「いきいき職長会ガイドブック」を活用し、行動指針を示すことにより、意識の向上が図られ、職長会活動の具体的な運営が維持できます。2年経過して「いきいき職長会表彰制度」を設けて表彰推薦者を募り、3名の優秀職長が選ばれ、2013年4月20日東京職長会総会で表彰されました。

その一人、文京区の国立大学総合研究棟作業所の西當一城職長は、2009年4月から3年半、最盛期には、約500人が稼働するような大規模現場の職長会副会長として日々奮闘し、立派に現場をまとめました。「いきいき職長会ガイドブック」を活用して現場運営を行い「職長会は自分たちで作ったという独自性があって、楽しいものでなければ続かない。」と考え、詰所から朝礼会場へ向かう導線に、全ての職長と所長を含めた職員が全作業員に対し「おはよう」と声を掛け合うハイタッチ運動を展開しました。効果として他職の職長の顔も覚え、現場がいきいき活性化し、誰でも気軽に注意しあえる環境ができました。

また、周辺の道路や校舎の出入り口までの清掃活動を行い、工事の騒音や搬出入車輛で迷惑を掛けている学校関係者の皆さんに対してのイメージアップを図っていました。

こうした現場職長会活動の具体例を模範として、会社の災防協や職長会総会の場で発表し、職長の能力、指導者の資質向上に取り組んでいます。



現場職長会 副会長
職長 西當一城



ハイタッチ運動



近隣の清掃活動

地域に心かよわせて連携を

未来を築く子供たちのために

仙台市ろりぼっぷ幼稚園の園庭盛土工事無償施工



仙台市若林区沖野にある「ろりぼっぷ幼稚園・ろりぼっぷ保育園」(学校法人ろりぼっぷ学園経営)が園庭の敷地拡張を行うにあたり、用地に使用する盛土用の土砂の無償提供をしてくれる企業を求める記事を今年3月に建設新聞に掲載しました。

東北支店営業課の伊藤課長と宮城営業所の佐々木係長は、「盛土無償提供を頼む」の新聞記事を目に留め、「是非、協力したい!!」という思いから、草野支店長に上申しました。

宮城営業所と連携し2,000m³の幼稚園敷地に3月末から3,000m³の土砂の搬入を始め、5月中旬頃に完了しました。

施工後、幼稚園側から感謝状贈呈の申し出があり、6月5日に園内で園児全員に囲まれながら感謝状の授与式が行われました。11月には園庭に冬の滑り台用小山を盛り上げました。

「人のお役に立ちたい！」想いが実現

新聞記事を見て、「人のお役に立てる！」と、すぐに車に乗り込み、ろりぼっぷ幼稚園の園長先生を訪ねました。盛土工事に協力させて頂くと申し上げた時の園長先生の嬉しそうな顔は、今でも忘れられません。

そして何よりも未来を担う子供たちの役に立て、誇りと喜びを感じています。今後も要望があれば、私たち建設業が役に立てることを積極的に行いたいと考えています。



東北支店 営業部
課長 伊藤修二



感謝状の授与式に東北支店稻村忠夫副支店長と伊藤修二課長が出席

地域交流をより緊密に

秋葉原フェスティバル2013

須田町二丁目御神輿完成祭に出店参加

本社がある千代田区神田須田町二丁目、神田川沿いに江戸鎮守柳森神社があります。この神社は、室町時代、太田道灌公が江戸城の鬼門除けとして、多くの柳をこの地に植え、京都の伏見稻荷を勧請したことによる神社です。

向井建設は氏子として、10月に開催される「たぬき祭り」の運営に毎年ボランティアとして協力しています。

今回は、例年のような準備や模擬店の担当ではなく、初の協力事業所として、祭では人気の高いじゃがバターと向友会副会長深瀬係長の出身地、山形名物玉こんにゃく(醤油煮込み)を販売することになりました。出店は大成功、見事完売となり売り上げを全額寄付することができました。

今年は、一段と深く地域とのふれあいや円満な交流ができ、須田町住民としての意識が高まりました。



向井会長がフェスティバルを応援に

神田祭で御神輿を担ぐ向祭会クラブ

1600年徳川家康が関ヶ原の合戦戦勝祈願を命じた神田明神の神田祭は、江戸三大祭りの一つとして有名です。4年ぶりに行われた神田祭に、今年も本社向祭会メンバーが参加しました。

地域の皆様と交流を深め「工事安全」「社運隆昌」の願いを込めて御神輿を担ぎました。

80年ぶりに新調された2尺8寸の御神輿を、町内の皆様と共に揃いの半纏をまとった向井建設社員たちが担ぎ、夕刻に感動の宮入りを果たしました。



御神輿の前の向祭会メンバー



5月に新調された御神輿 初めての宮入り

感動創造企業を目指して

現場感動エピソード集小冊子作成

遠藤社長が2009年社長に就任後、新たに経営方針として「理念浸透型経営」を掲げて以来「感動創造企業の実現」を目指した取組みを進めています。

「現場は人が作る、その協働作業で生まれる感動」を皆で共有し、働くエネルギーの糧にすると共に、経営理念を現場の人たちに浸透し、伝えていくための一環として、現場での感動体験を集めることになりました。9月に「現場感動エピソード」の募集開始。現場で元請・同業他社・近隣住民の方から褒めて頂いたり、喜ばれた体験談を社員、協力会社の方々に広報したところ、86編の応募がありました。寄せられた文章一つ一つに書き手の苦労や人間関係の機微が表されていて、選ぶのは難しかったのですが、優秀賞1編、優良賞5編を「現場感動エピソード集」として小冊子にまとめました。

第1回優秀賞に選ばれた下記の作品は、現場映像を挿入したDVDに編集され、2013年8月の創業記念式典で発表されました。

「人生の喜びと感動を創造する」という経営理念を、具体的なイメージとしてDVDに表現し、人が協働して造り上げる物づくりの素晴らしさ、心遣いの大切さを実感してもらい、現場でも活かせるよう、今後も社内教育用の教材として活用していきます。



所長と二人三脚 「オレとお前だから、ここまで来られた。」

土木統括部
水島正明



2011年6月から2012年10月末まで1年5ヶ月にわたり、元請出向社員として、また当社の現場担当も兼ねて、現場所長と2人で都内の地下鉄某駅の工事にあたっていた。

土木工事分としては、土工事から山留工事、地下躯体構築まで行う工事で、土量3000m³、山留40tを4ヶ月の工程で施工を行う予定であった。しかし、合計8回もの異常出水のため、4ヶ月の施工予定に対し、6ヶ月もの工期を費やす難工事となった。出水のたび、当社の協力会社の職人たちと元請所長も一緒になり、防水業者が来るまで、土のうやトンパックを積み、水中ポンプを据え付け、全身ズブ濡れになりながら、現場が大惨事となるないように、時間が経つのも忘れ、いつ止まるとも知れない出水と必死に格闘していた。何とか応急措置を施し、防水業者による止水が完了するのも束の間、次の掘削に移ると、また出水といったことの繰り返しだった。（中略）

どんどん工期は無くなり、とうとう現場を早い工区と遅い工区に分け、土工事と躯体工事を同時に進行せざるをえなくなつたが、駅前の非常に狭い現場であり、土工事と躯体工事を同時にすることは困難を極めた。

毎日、少しでも早く掘削の残土搬出を終わらせ、夕方の1～2時間で必要材料を搬入する予定を組み、必死に工事を進めていった。そんな状況でも職員の増員は無く、管理の体制は所長と私の2名のままだった。

あれは、忘れもしない8月2日、時刻は夕方6時過ぎ。

当日は掘削工事と鉄筋工事を予定通り消化し、当社の職人さんはすでに帰宅し、私一人で墨出しを行っていた。なかなか事務所に戻らない私を心配して、所長が現場を見に来た時のことだった。掘削箇所付近から水の流れる音が聞こえてきた……。「おかしい！」と思い水の音を頼りに歩いて行くと、やはり出水していた。しかも、かなりの量だ……

2人同時にため息を漏らした。「またか……」（中略）

所長と二人で土のうを積み、木毛を詰め、私はバックホウで水路を切るなど、できる限りの応急措置を施していた。（中略）

水中ポンプが届いたのは夜10時頃だった。私がクレーンに乗り、所長が合図をし、地下15mまで水中ポンプを下ろして、所長は配線を引き直し、私はホースを繋ぎ込み、何とか様子見のできる段階までこぎつけた。明日の朝には、防水業者も来てくれる手配も整ったが、時計はすでに、深夜2時を回っていた。「オレ、先に事務所に上がるぞ」と言う所長に、私は、「もう少し様子を見て、水中ポンプの整備をしてから上がります」と答えた。1時間程して所長はもう寝ているだろうとそっと事務所に入ったが、そこにはタバコをふかしながら、テレビを見ている所長が居た。「おう水島、お疲れさん」そう言って缶コーヒーを1本テーブルの上に差し出してくれた。「しかし疲れたな。でも本当に出向社員がお前で良かったよ。うちの職員ではバックホウもクレーンも乗れない……。お前は何でもできるもんな。はっきり言って、オレとお前だからここまで来られたし、この程度で済んでいるとオレは思っている。」正直疲れていたが、何よりもありがたい一言だった。いただいた缶コーヒーは車のおまけが付いている物だった。以前「このおまけ、子供が好きなんです」と所長に話したことがあったのを覚えてくれていたのだ。「これ、お前の子供が好きなんだろ？ どれが好きなのか分からなかったが、とにかく買って来た。」照れくさそうに話してくれた所長の姿を見て、私は涙が出そうになった。

しばし、明日の打合せをし、それぞれ事務所の床に毛布を引いて、少し仮眠を取ろうと電気を消した時、所長が、「はあ～。もう4時か。明日なんか来なければ良いのに……辛いな～、でも現場を張ってるお前の方が、もっと辛いんだよな。もう少しだ、お互い頑張ろう！ いつか終わって、うまい酒が飲める時が来るよ。」そう言って、毛布にくるまった。

その後も、所長と2人で休みも無く、時には昼夜で躯体工事を行った結果、工期内に工事を終わらせることができ、竣工検査では発注者から高得点をいただいた。本当に二人三脚で歩んだ現場だったが、それを支えてくれた家族と会社関係者、協力会社の方々に心から感謝している。

更なる安全性を求めて

情熱を注ぎ磨き続ける安全性

フルハーネス安全帯普及により、高所作業を安全にかつて「怪我と弁当手前持ち」というように建設職人は、労働災害にあっても保障が薄く、身を守る安全帯、ヘルメット、安全ネットなどの設備も普及していなかった。安全帯も1951年頃から綿帆布・革バンド、綿ロープの安全帯が開発されはじめ、1957年には固定フック式ビニロンロープの安全帯、1963年には建設業でも現行品の原型ができた。

徐々に向井建設でも着用指導するが「動きづらい、格好悪い」と薦たちは付けたがらなかつたが、1976年には大口径フックの安全帯が開発され、指導を強力に進めた結果1980年代半ばには着用・使用率が一気に向上した。現在ではフルハーネス型など墜落時に衝撃の少ない安全帯の普及に努めている。



1976年頃
建設現場に直掛けできる大口径
フックが開発された。



現在では全身につける安全帯として
フルハーネスを着用し安全性が向上

変化するヘルメット、進化する安全性と機能

ヘルメット着用が義務化されるまで、職人はねじり鉢巻やハンチング帽などを被っていたが、災害が多い建設現場を改善しようと1957年頃からヘルメットの着用指導がはじまつた。向井建設では1955年代半ばからヘルメットを支給していたが、本格的に着用されるようになるには10年ほどかかった。

1980年、現会長向井敏雄が社長に就任したとき、白いヘルメットを現在の色「ビーコックグリーン」に変更し、一目で社員、職長、作業員が識別できる色別ラインをヘルメットに塗装した。次に保有資格のシールをデザインして、ヘルメットに貼り付けたが、これは当社が先駆けであった。

1990年全社的CI活動が展開され、ユニフォームとヘルメットが一新された。

2012年11月から着用を開始したヘルメットは、更に安全性が強化され、ベンチレーション付きで



安全性の向上した最新ヘルメット

通気性もあり、ひさしは透明になり視界が広くなっている。またシールド内蔵タイプは従来よりワイドになり、側面からの飛散物からも目を守れるようになり、安全性・機能性が改良されている。



1960年頃南部総合施工中の社員たち

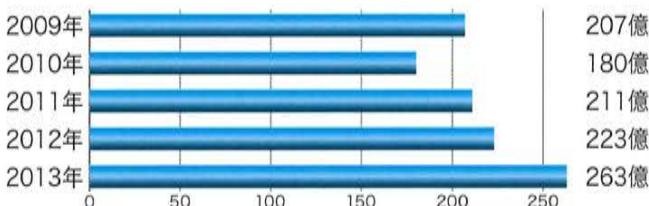


2013年の新入社員たち
(富士教育訓練センターにて)

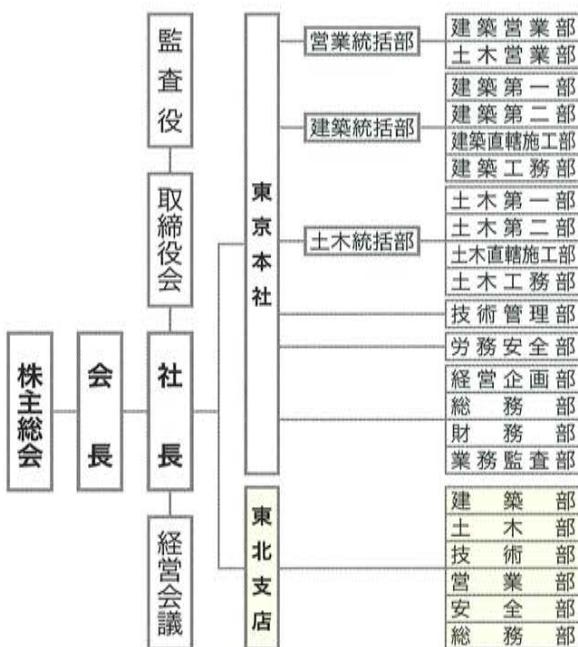
会社概要

社名 向井建設株式会社
代表者 代表取締役会長 向井敏雄
本社 代表取締役社長 遠藤和彦
支店 東京都千代田区神田須田町2-8-1
営業所 東北支店
横浜・東関東・北関東・名古屋・青森・秋田
岩手・山形・宮城・福島
いわき・気仙沼
設立 1908年8月1日
資本金 1951年1月25日
100,000,000円
従業員 630名
事業内容 建築一式工事・土木一式工事
とび土工・コンクリート工事、型枠工事 他

売上高



組織図



グループ企業

向井総業(株) 東京都千代田区神田須田町2-8-1
(株)トータル・オフィス・ムカイ 東京都千代田区神田須田町2-8-1
エス・ティ・ムカイ(株) 東京都千代田区神田須田町2-8-1
MKエコプラント(株) 宮城県仙台市青葉区一番町2-5-17
(株)稻田組 北海道札幌市豊平区月寒中央通り3-1
目黒ターミナルビル(株) 東京都品川区北品川5-5-27-604